

## 成形粗飼料利用による肉用牛集団哺育技術 (第1報)

菊地 惇・亀川 昭・浦上次男  
(長崎県畜産試験場)

肉用牛子牛の集団哺育は概して発育のバラツキが大きく、市場性の低い牛も見受けられる。最近の親子分離哺育法は採食量増加による発育改善効果は明らかであるが採食競争の問題は依然として残る。これを打開するため給与飼料を基本的に考え直し、どの子牛でも栄養バランスの取れた飼料を十分に採食できるような飼料面からの工夫として、成形粗飼料を試作し、哺育飼料としての予備試験を実施した。

### 1. 試験方法

#### 1) 試験期間

昭和53年9月5日から11月29日 (85日間)

#### 2) 供試牛

母牛は4才～8才、3産～6産次でほぼ1ヵ月間に生まれた雌子牛3頭、雄子牛4頭、計7頭(親子7組)を供試した。

#### 3) 哺育別飼飼料

粗濃別	内 容	D.M	D.C.P	T.D.N
粗飼料	稲ワラ40%, ミカンジュース 粕乾燥粉末40%. アルコール 廃液20%, 混合8mm径ペレット	% 84.0	% 2.1	% 54.8
濃厚飼料	幼牛用8mm径ペレット	87.0	14.0	70.0

#### 4) 管理

屋外群飼で、生後3ヵ月頃より親子を分離、子牛は3アールの運動場よりなる別飼施設に迫込み、柵越しに哺乳させた。

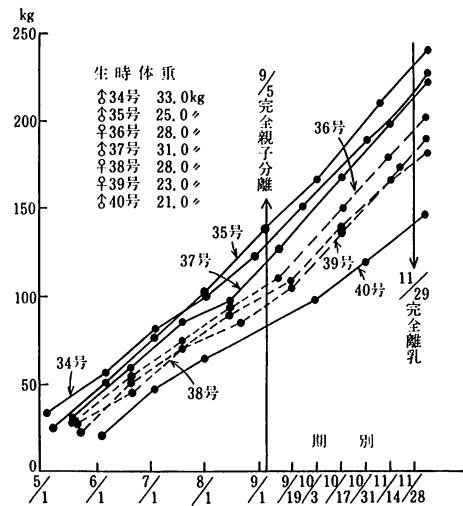
### 2. 試験結果

各期別の1日当り採食量は第2図の通りである。濃・粗飼料を混合して1日2回分与した。柵越哺乳法で哺乳回数を制限した関係もあり、成形粗飼料の採食性は良く、飼料全体の採食量は大となった。各個体の発育成績は第1図の通りで、親子分離、成形粗飼料給与期に入ってから増体は益々上昇した。体各部位の発育は極めて良好で栄養度指数は6ヵ月令平均1.8であった。

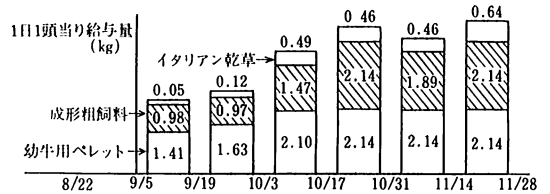
### 3. ま と め

子牛の成形粗飼料に対する嗜好、採食は良好で、増体

についても試験期間85日間の雄平均 D.G 1.00kg、雌平均0.98kg、平均0.99kgと優れた成績を示し、性別、日令別の増体ムラは見られなかった。なお、柵越哺乳は容易で数日後には習熟した。



第1図 集団哺育子牛の発育



第2図 親子分離期間の別飼飼料給与量 (7頭平均)

第1表 親子分離時間の発育と養分量 (7頭平均)

項目	期別	親子分離時間				
		9/5~9/18	9/19~9/22	9/23~9/26	9/27~9/30	10/1~10/4
1日1頭当り平均増体重		0.82	0.99	1.07	1.05	1.04
飼料からの養分量	D.M	2.11	2.33	3.48	4.06	3.85
	D.C.P	0.22	0.25	0.34	0.36	0.36
	T.D.N	1.57	1.73	2.51	2.88	2.75